

いたちかわらばん

通刊40号 鮰川・狹川 / 川原番・瓦版 08 冬号



【版画 宗森英夫】 瀬上沢入口の横堰 (よこせき)

いたちかわらばん発刊10周年(40号)発行に寄せて

- 第40号発行おめでとうございます。1999年冬号(第4号)の特集でみなさんと描いた「初夢」の一つ、いたち川流域の地域通貨を、「イ・タッチ」と名付けて社会実験中です。今年の第三次実験を経て、『初夢』が「正夢」になりますように。(大塚宏)
- 自分は一体何時から参加したのだろうか?と調べてみたら3年前の28号からだ。僅かに後半3割の参加だが、以来積極的に諸活動に参加して充実感を得ている。3割バッテリーに止まらずこれからも編集委員の一角を担って健闘して行きたい。(生越勝栄)
- 12年前、「いたち情報マップ」の企画に参加したメンバーで発足したOTASUKE隊がマップの製作を終え、「いたちかわらばん」創刊号を発行したのが98年4月、それから10年、親水事業が進むいたち川変遷の歩みと共に今日に至りました。これからもいたち川流域情報誌として役立つ存在でありたいと思います。(木村賀数)
- いたち川マップを作るので、手伝いませんか?と声をかけていただいて夫婦で参加しました。毎月の会議と年4回のかわら版発行。そして、いたち川散策と水源調査の中で水質のこと、植物、鳥、魚、ホタルなど、少しずつ知識が深くなってきました。これからは楽しみながら参加させて貰いたいと思います。(草本勝次&和子)
- 私は何の役にも立てず、3年程在籍しておりました。自然環境保護が叫ばれる昨今、OTASUKE隊の役割が益々重要となってきています。今後の一層の活躍を願っています。(小華和絃記)
- 人の願いや思いによって、自然豊かに蘇ったいたち川。「いたちかわらばん」として語り継ぎ、次世代にバトンタッチすべき宝です。フクロウ、カルガモ、ニリンソウ。絵本にも負けない本物の自然に、今、ここでふれることができる。(坂田邦江)
- OTASUKE隊が結成された1995年以来、「いたちかわらばん」の命名から10年、思えばいたち川を紹介して多くの人々との出会いがありました。川は流れ、人は年を重ねて日々新たに生きていることを実感します。(杉浦尚子)
- 近頃いたち川から、愛嬌者のアヒルが姿を消してしまっただけでしょうか。道行く人々の目を楽しませ、心を和ませてくれていたアヒル達。壊れ行く地球の自然を何としても守らなくては・・・。小さな出来る事から。と思っています。(高山ノリ子)
- OTASUKE隊の中では、しばらくご無沙汰している“とりすぎ”です。川遊びを知らない世代の私が、原体験を求め、たどり着いたのがOTASUKE隊。いまでは一児の父となりましたが、これからは川と向き合っていきたいと思っています。(角田定孝)
- 「いたちかわらばん」を読んで感動し、28号の発行間際に入隊した一番新しい隊員です。子供の頃は阿蘇山の麓、白川村で過ごしました。いたち川は阿蘇にも負けない素晴らしい川です。40刊のかわらばんは内容豊富で素晴らしく、読み返して生活の糧とします。(古屋好文)
- 6年前いたち川にからむ歴史を勉強しようとして入隊しましたが、あまり成果が上がっていないのが悩みの種。勉強のテーマ替えをしようかと思っています。この数十年で見違えるようにきれいになったいたち川を大事にしなくてはと思っています。(光武弘美)
- 刷り上った「いたちかわらばん」を近くの公共施設に届けていますが、何処でも笑顔で受け取っていただいています。いたち川の改修工事は水害対策だけではなく、川本来の土手を復活させ自然を復元させた成功例として、地域の誇りとして今後も広報に努めて行きたいと思っています。(山脇弘毅)
- いたち川OTASUKE隊を結成して12年、かわらばんを発行して10年、その間地元の長老から昔話を聞き記事にしてきましたが、紙上に紹介出来たのは一部で今後も取材を続けて後世に記録を残して行きたいと思っています。(和久井征治)

「いたちかわらばん」40号を迎えて

一九九八年四月に「いたちかわらばん」創刊号を発行して以来、十年が過ぎ去りました。この間、季刊誌として春・夏・秋・冬の年四回発行を堅持し、40号を迎えることができました。

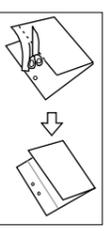
この十年間で、栄区の街の景観もかなり変貌しましたが、いたち川周辺でも、様々な変化がありました。両岸のプロムナードの整備が少しずつ進み、最下流の「いたち川橋」から「尾月橋」までの区間が完了しました。いたち川に架かる最大の橋「天神橋」が鎌倉街道の拡幅に伴い四車線の新しいものに架け替えられたり、「石原橋」や「ほたる橋」、「上郷橋」等が新設されました。逆に、右支流の一部が暗渠化されたのに伴い「西前橋」や「駒形堂橋」が消えてなくなりました。

また、「扇橋の水辺」、「稲荷森の水辺」、「坊中の水辺」等の親水公園が次々と新設されました。流域の住宅街も建替えや新築で様変わりしました。表紙絵に採用した場所も現在では変わってしまっている所が何箇所もあります。例えば、第四号(一九九九年)で紹介した稲荷森の水辺から当時は富士山がよく見えたのですが、現在では樹木が生い茂って全然見えません。河川敷の植物は年毎、季節毎、大雨で増水する毎に、変化します。ですから、一度描いた場所も数年経つと、違った景観になります。

いたち川と関連のある生物を紹介してきましたが、鳥類一〇種、魚類一三種、甲殻類一種、爬虫類五種、哺乳類二種、昆虫類五種、植物一五種です。もっと、いろいろな生物がいたち川の水辺で生活しています。お互いの相関関係や食物連鎖などを注目するのもおもしろいと思います。(宗森英夫)

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です



発行年月 2008年1月	発行：狹川OTASUKE隊 (いたちがわおたすけたい) OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 栄土木事務所下水道・公園係	〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19 TEL 045-894-8161 FAX 045-895-2260 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1 TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421 (お便り・お問い合わせはこちらまで)
通刊40号		

「いたち川散策マップ」を歩く

この度、いたち川散策（ガイド）マップを改訂することになり、現地調査を行うことになった。川の上流部と下流部の二つに分けて調査する。

調査隊は OTASUKE 隊員、土木事務所所員、区の担当者合わせて9人、調査ルートは、大いたち橋～最下流のいたち川橋～中流域の石原橋までである。今回はその下流部の調査時に目に付いた川沿い風景を描写してみる。

(1) アカンサスとコリント様式

道の脇にあるギザギザした大きな葉っぱの草は「アカンサス」だという。ギリシャの神殿の柱頭部を飾るコリント様式の模様はこの葉っぱを模したものだという。

植物を教えるのにこれほど印象的に教えるとは思わなかった。単に名前を教えるのではなくて“世界史や美術史に結びつくような形”で教える、こうなれば教わる方の受取り方がまるで違う。説明者の造詣の深さばかりでなく説明の妙に感心した・・・感心したついでに帰宅してからアカンサスについて調べてみた。

植物分類では「キツネノマゴ科アカンサス属」、園芸分類では「耐寒性宿根草」。葉がアザミに似るため和名を「ハアザミ」というがアザミではない。葉は、楕円形で、長さ50センチ以上で「羽状深裂」、歯牙があって光沢がある大きい濃緑色。原産地は西地中海沿岸で、我が国には大正時代に渡来した花壇植物。葉や根にはタンニンを含み、下痢止めや止血に使われた。属名の Acanthus はギリシャ語 akantha（トゲ）に由来するが、これは葉縁にトゲがあることによる。

(2) たわわに実るカリンの実

いたち川の最下流に近いいたち川橋の付近、川沿いの道のわきに立つ木の上部に沢山の実はぶら下がっている。カリンの実だ。葉っぱは既に落ちていて、青い空の中に丸い実だけが無数に浮かんでいるように見える。勿体ないなあー、長い竿の先に鎌のようなものを取り付けて刈り取るわけには行かないか？のどに薬用効果のある「カリン酒」を造って愛飲して貰えば木も実も報われるというものではないのか。

(3) 赤い星の花

「ルコウソウ」という草花も教えてもらったが、クリスマスを飾り付けるような小さな星形の真紅の花で、初めて見る印象的な可愛い花である。音の響きがアカンサス同様に外国風で気になる花だ。

インターネットで調べてみたら比較的ありふれたものらしくて沢山の写真が掲げられていた。「蔓性植物で深い切れ込みの繊細な葉、小さい星型の真っ赤な花が特徴。花は一日花で、朝咲いて夕方萎む」となっており、漢字もあって「縷紅草」と書くという。しかし白い花も橙色の花もあって決して真紅の色だけではないようだ。

(4) 監視カメラと水位計

水神橋には監視カメラが据付けられている。市の防災情報ホームページを見てみると、安全管理局危機管理室のページに「河川監視カメラ画像」の中「境川水系」の「水神橋（いたち川）」として鮮明な画像が紹介され

ている。このホームページを一度覗いてみることをお勧めする。川の監視は視覚的なものだけではない。水神橋より上流の花の木橋のもとには水位計があって川の水位が測定されデータが遠隔伝送されている。

(5) 鳥飛び、魚跳ねる

アオサギが羽を広げて石から石へ飛ぶ。ほんの短い距離なので人なら「ヒョイと跳ぶ」という状況なのだが鳥は羽を広げて跳ぶ。はばたくような激しさがなく優雅なしぐさである。所が、水中では自分が襲われたと思った沢山の鯉が慌てて跳ねる。アオサギは何を狙っているのだろうか？まさかあの大きな鯉は食べないだろうから、うじゃうじゃと表現するほど沢山泳いでいる小魚（多分、オイカワの子）を食べようとしているのであろう。

(6) 樹木表示版の訂正

コナラと書かれた樹名札の上の部分に「コナラではなくてクヌギです」と手書きの修正文があった。誰かが樹木の名札の記載間違いを発見して修正してくれたものらしい。早速、土木の担当者が応急措置としてテープを貼ってその表面にマジックペンで正しい樹名「クヌギ」と表示する。こうした間違いを発見するのも調査の目的の一つである。

(7) ザクロとムクの実を食べてみる

いつものことながら目に付いた樹木の名を確認する。今回はそれ以上の丁寧な確認作業を行った、即ち「実がついていれば採って食べてみる」という作業だ。みんなで子供の頃を思い出して懐かしがりながら木の実をかじって食べてみた。思い出は多分昭和20年代ではあるまいか。どの地方の出身か？と問う必要は無い。往時、日本国中のどの地方であっても、子供たちは同じような経験をしていた筈だからである。食べた木の実は「ザクロ」と「ムク」の実の2種類。ザクロはまだ熟しておらず味なし・・・というよりもやや渋い感じ、ムクの実はプルーンの味がして美味しかった。

(8) 樹上の鳥を観察

檜の樹上にアオゲラ発見！場所は、稲荷森の水辺の四阿の傍である。ちょうどランチをとっていた所だったので全員が2台の双眼鏡で詳しく観察した。いたち川周辺にはこれこれの鳥がいます、と図入りの表示板を見ることがあり、そこにはかなりたくさんの鳥たちの図を見ることが出来る。しかし、実物にはなかなかお目に掛かれないのでその存在を疑うこともあったが、こうして頭上の実物にお目に掛かると感動する。“ああ、お前もいたんだね！”とその実在を祝福したくなる。結構大柄の鳥で、ヒヨドリよりもはるかに大きい。図鑑で調べたら、キツツキ目、キツツキ科の留鳥（一年中同じ地域にとどまって生活する鳥）で全長は29センチ、ピョーピョー



ーピョーと啼く・・・とあった。我々はこの場所に20分以上も居たのだが鳥は多少位置は変えたものの飛び立つことなく存在しつづけた。

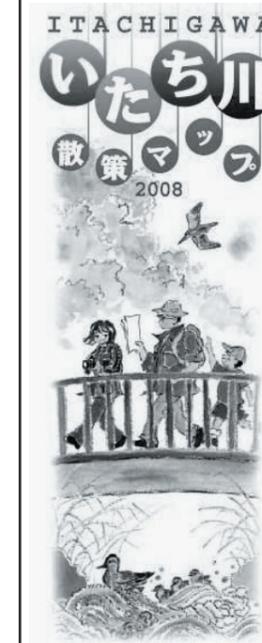
(9) 石原橋

ご存知のように昨年出来た新しい橋だから散策ガイドマップに追加記載しなければならない橋である。欄干が、下流の扇橋と同じような赤い色に塗装されていてよく目立つ。

この橋の周辺は整備して公園になる予定なのだが用地取得等の問題からまだ時間がかかる見通しだという。

橋のもとで参加者全員の記念写真を撮る。土木事務所の人は橋の完成祝賀式の折に同じ場所で写真を撮ったのだと橋との愛着の深さを言外にこめて言う。（ピンテール）

「いたち川散策マップ」～第3版が発行されます～



「いたち川散策マップ」は、私たち、いたち川OTASUKE隊が現地調査で得た情報を基にして作成されたもので、4つの散策モデルコースや、流域で見られる生き物などを紹介した散策に便利なマップです。

第3版では、水辺拠点の整備状況などを反映させた他、昨年行われた「いたち川写真展」応募作品も新しく掲載するなど、いたち川の魅力満載です。

2月1日から、栄区役所1階の売店及び市民情報センターにて1部100円で販売します。

散策のお供に、是非ご利用下さい。